探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：坂中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
坂小学校	14	310
横浜小学校	16	320
小屋浦小学校	7	62
坂中学校	13	362

（R5.12.1現在で記入）

１　研究の概要

（１）研究テーマ及び研究のねらい

〇研究テーマ

主体的に学ぶ児童生徒の育成～生活科・総合的な学習の時間におけるICTを効果的に活用した授業づくりを通して～

〇研究のねらい

昨年度、坂中学校区では系統的に育成を目指す資質・能力を明らかにし、そのゴールの姿をイメージしながら、生活科・総合的な学習の時間を中心として、ICTを探究の道具としてより効果的に活用し、探究的な学習の過程を充実させ、主体的に学ぶ児童生徒を育成することをねらいとして取組を行ってきた。特に「学習過程を探究的にすること」と「他者と協働して主体的に取り組む学習活動にすること」のさらなる充実に向けて、中学校区全体で取り組んだ。今年度は、昨年度の取組を継承しながら、今まで行ってきた活動を更に改善するとともに、外部への発信に向けて具体的な活動を行うことを通して、主体的に学ぶ児童生徒の育成を目指していく。

（２）資質・能力の設定について

本事業１年目では、研究推進協議会を中心に、坂中学校区で育成を目指す資質・能力を設定するとともに、児童生徒の発達段階を４つに分け、その具体的な目指す姿について整理した。

２年目は、総合的な学習の時間と各教科等の相互の関わりを意識しながら、学校全体で育てたい資質・能力に対応したカリキュラム・マネジメントが行われるように、総合的な学習の時間を通して、どのような資質・能力を育成するのかを明らかにし、単元を開発することに取り組んだ。坂中学校３年生の単元「お互いの命をまもり合おう」では、表１のように、学校の教育活動全体を通して身に付ける資質・能力について、総合的な学習の時間が果たす役割を意識しながら、育成すべき資質・能力を具体の姿で表した。

表１

単元「お互いの命をまもり合おう」における育成を目指す資質・能力の具体の姿	
チャレンジする力 【挑戦】 【粘り強さ】 【解決力】	・ふるさと坂について自分たちが知っていることや経験したことと、新たに学習したこととのズレを通して、自らが解決したい課題をもち、解決に向けて果敢に挑戦している。 ・課題解決に向け主体的に取り組む中、試行錯誤しながらあきらめず取り組んでいる。
表現する力 【自分】 【目的・相手・場面】 【工夫】	・ふるさと坂の防災について自分で考えたこと、グループで考えたことを、目的や相手、場面に応じて、内容や方法、表現の仕方などを工夫しながら伝えることができる。 ・コロナ禍だからこその ICT の価値に気付き、ICT を効果的に活用して、自分たちの考えや思いを表現することができる。
協力・貢献する力 【役割】 【行動力】 【感謝】	・学校や家庭、地域の中での役割を自覚し、皆と協力して、ふるさと坂の課題を解決するために行動している。 ・ふるさと坂の防災のために、地域の一員として、また中学生として、どのようなことができるのかを考え、行動している。

（３）取組について

①課題意識をもたせるしかけ

自分が想像していたこととのズレを感じさせたり、憧れをもたせたりするための工夫を行う。

②ＩＣＴの効果的な活用

ＩＣＴの、時間的・空間的制約を超えること・双方向性を有すること・カスタマイズが容易であることなどの特徴を生かし、これまでの教育活動において実施が困難だった活動や、時間がかかっていた活動を単元の中に積極的に取り入れる。

③ゲストティーチャーの効果的な活用

外部人材（外部機関）を積極的・効果的に活用し、生徒にとって充実した活動となるようにする。

２　実践事例

上記の（３）の取組の具体例として、中学校区のゴールである坂中学校第３学年「お互いの命をまもり合おう」の単元において実践事例を示す。なお、本単元の探究の流れは、図２－１、図２－２に示している。

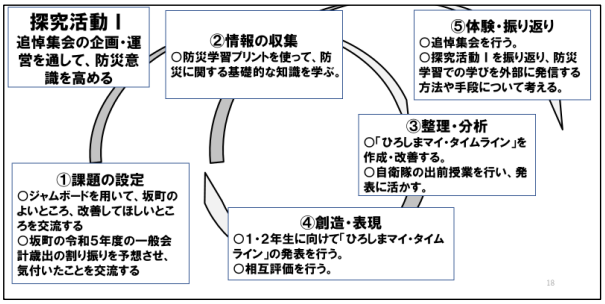

図２－１（探究活動Ⅰ）

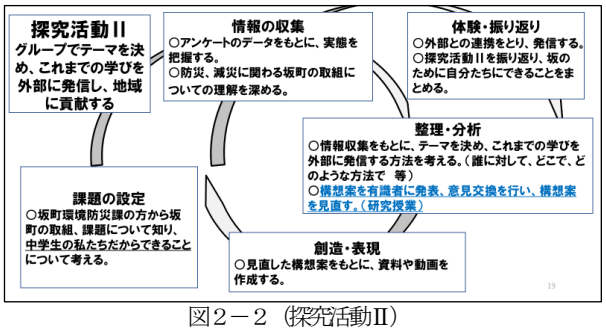

図２－２（探究活動Ⅱ）

①課題意識をもたせるしかけ

探究活動Ⅰの「課題の設定」において、坂町の一般会計歳出について考えさせた。その際、生徒がもっている災害復旧や防災に関わる認識とのズレをより明確に意識させるために、令和元年度と比較させる前に、今年度の歳出の割り振りがどのようになっているかをクイズ形式で考えさせた。ほとんどの生徒が、災害復旧費に億単位のお金が使われていると考えていたが、実際には１万円という予算配分になっていた。そこから令和元年度の災害復旧費５億５０００万円と比較し、災害復旧費が減っているという事実を知った生徒は、坂町の施策が復旧から復興へと変化していることに気付くとともに、自分たちの認識とのズレを感じ、「こんなに減っているとは思わなかった。」「災害復旧・防災は本当にもう終わったのだろうか」「予算が少なくなっている中で、中学生としてふるさと坂のためにできることはないか」と主体的に考えることができた。

②ＩＣＴの効果的な活用

探究活動Ⅰの「整理・分析」「創造・表現」において、タブレット端末で１人ずつ自分の「ひろしまマイ・タイムライン」を作った。そして「豪雨災害追悼集会」で、Google meetを使って、代表生徒が１・２年生に向けて、作成方法や作成上の留意点などについて、自分のマイ・タイムラインを画面共有で示しながら、説明

を行った。ＩＣＴを活用することで，学習成果を教師や生徒間で共有したり，クラス内だけでなく広く発信したりすることができた。

また、探究活動Ⅱの「体験・振り返り」では、坂町立小屋浦小学校４・５年生とオンライン交流会を行った。生徒は、クイズを交えながらハザードマップや防災グッズなどについて説明したり、自衛隊の出前授業で学んだことを、説明を加えながら実演し、それを動画で撮影したりするなど、ICT機器を活用しながら発表を行った。お互いにやったきたことを交流でき、これからの活動や互いの防災意識を高めることにつながるものとして、非常に充実した取組になった。

③ゲストティーチャーの効果的な活用

探究活動Ｉで、「ひろしまマイ・タイムライン」を作成する際、自衛隊の出前授業を取り入れた。災害時に使える防災テクニックや、実際に災害現場で活躍された自衛隊の方のお話を聞く中で、もう一度自分の作った「ひろしまマイ・タイムライン」を改善し、発表に向けて準備をした。その際自衛隊の出前授業を、整理・分析の場面で活用したことで、より生徒の防災意識の高まりが感じられた。今までなんとなく「ひろしまマイ・タイムライン」を作って終わりだった生徒も、「家族と本当にどうするか話し合った」「避難場所はいつもここだと思っていたけど変えよう」など、自分事として捉えて修正し、完成させていた。

また、探究活動Ⅱの「整理・分析」の場面では、各グループが考えた構想案をゲストティーチャーに向けて発表、交流し、構想案を修正・改善する機会を設定した。総合担当の教員が、ゲストティーチャーと綿密に事前連携を行い、専門家としての思いを受け止めた上で、生徒に語りかけてもらう内容について検討した。その成果もあり、授業ではゲストティーチャーの話を基に学びを深めていた。

ゲストティーチャーを積極的・効果的に活用することで、専門家からの学びを得ることができ、生徒だけでは考えつかなかった新たなアイデアをもらえたり、新しい課題を発見したりすることにつながっていった。探究のサイクルの変わり目や、生徒が実際に成果物を作っていく過程、まとめの場面など、様々なタイミングで、その時々に合った活用を行っていくことで、探究的な学習がより深まっていくと感じた。

３　研究の成果と課題等

（１）成果

成果については、大きく３点挙げられる。

１点目は、探究的な学習の授業づくりにおけるポイントを三つにまとめたことである。このまとめたことを、他学年の総合的な学習の時間の単元づくりや、各教科の授業づくりに活かしていけるように研究を続けていきたい。

２点目は、生徒の資質・能力の向上が見られたことである。

本単元を実施する前に行ったアンケートの数値と、単元終了後のアンケートの数値を比較すると、全ての質問において肯定的な回答の割合が増加した。アンケートの結果を表３に示す。

表３

アンケート項目	肯定的回答の割合	単元前の回答からの増加分
授業では、課題を解決するために、進んで資料を集めたり取材をしたりしている。	85.7	48.5
授業では、友達と話し合うなどして、自分の考えを深めたり、広げたりしている。	97	5.2
授業では、調べたことなどを、図、グラフ、表などにまとめている。	81.6	47.1
授業では、解決しようとする課題について、「なぜだろう」「やってみたい」と思って取り組んでいる。	82.7	11.8
学習の振り返りをする時には、「もっと考えてみたいこと」「もっと調べてみたいこと」などを考えている。	88.8	27.9

生徒が主体となって創り出した課題について、試行錯誤しながら探究的に学びを深めたことで、このような高い数値となったと考えられる。また単元の最後に書かせた振り返りの中には、初めは自分にできる事は少ないかもしれないと、学習内容を消極的に捉えていた生徒が、単元での学習を通して、この問題を自分の事として捉え、地域に貢献するために自分にできる事を考えている姿が見られた。地域の状況も踏まえて、自分に何ができるかを考え、答えを見い出していた。社会の担い手として、あるいは地域の担い手としてこの問題を考え、地域に貢献しようとする思いが醸成された。

３点目は、中学校区での連携の質が高まったことである。この３年間、「目指すべき児童生徒の資質・能力」の具体の姿を設定することをはじめ、それに基づく生活科・総合的な学習の時間における評価の在り方や探究的な学習について中学校区での連携を多くの場面で行ってきた。最終年度では、小学校だけでなく、保育所等も参加した研究授業や、小中合同の模擬授業での指導案の練り直し、小学校とのオンライン交流会など、義務教育９年間を見通した学習になるように、連携を行うことができた。

（２）課題

課題は、大きく２点挙げられる。

１点目は、中学校区として系統的に育成を目指す資質・能力に基づいた生活科・総合的な学習の時間の評価の在り方についてである。３年間、評価の在り方について研究を進めてきた。小中合同の模擬授業では、実際に参加した先生方に文章を書いてもらい、それをルーブリックに照らして、どの評価にあたるかを考えた。それを基に再度ルーブリックを修正したが、指導と評価を一体化させるための、精緻で具体的なルーブリックの作成の難しさを改めて感じた。

２点目は、他学年・他教科への広がりである。今回各小中学校で探究的な学習を踏まえた単元の開発を行った。探究的な学習のポイントを取り入れながらの単元は全学年少しずつ行っているが、中学校では第三学年の防災の授業が中心であった。

（３）今後の改善方策等

上記の課題を踏まえ、今後に向けて次の２点を行っていきたい。

１点目は、中学校区として系統的に育成を目指す資質・能力に基づいた生活科・総合的な学習の時間の評価の在り方についての、継続的な研究である。精緻で具体的なルーブリックの作成を目指すとともに、その都度、児童生徒の姿と照らし合わせて吟味・検討していく。

２点目は、探究的な学習の授業づくりにおけるポイントを総合的な学習の時間のみならず、他教科にも広げて、単元開発を行っていく。